

堀
和
久

義経と河越一族

ものもの
のふの大地

堀和久

もののふの大地

義経と河越一族

〈著者略歴〉

堀 和久 (ほり・かずひさ)

本名、堀江和男。昭和6年福岡県生まれ。日大芸術学部映画科中退。浅草フランス座などの宣伝部員を経て、昭和52年、歴史小説『享保買象始末』で第51回オール讀物新人賞を受賞。著書に『大久保長安』『織田有楽斎』（講談社）『春日局』（文藝春秋）『滅びの岬』『死にとうない』（新人物往来社）など、歴史に材をとった小説を多数発表している。

もののふの大地―義経と河越一族―

一九九二年八月二〇日 第一刷発行

著 者 堀 和久

発行者 菅 英志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三―三―一（新東京ビルディング）〒一〇〇
電話東京（三―二―）三九三―（代表） 振替東京六一―五―六四三

印刷所 大日本印刷

製本所 小泉製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。



目次

第一章 武蔵河越荘 5

第二章 鎌倉 80

第三章 京の都 178

第四章 平泉 248

装帧／安彦勝博

もののふの大地

義経と河越一族

第一章 武蔵河越莊

一

「また、早馬でございます」

姫に日傘をさしかけていた乳母めのとの千歳ちとせが眉をひそめた。

新日吉社にいひえ（日枝神社）の鳥居前は、領主河越太郎重頼しげよりの館やかたへ至る往還である。東海道と東山道を結ぶ、いくつかの街道の、枝道の一つであった。

往還は武蔵国府（府中市）を経ており、その南の方には、近ごろ不穏な動きが伝えられる、源氏嫡流の流人源みなものよりとも頼朝が隠棲する伊豆の蛭ヶ小島ひるこじまがある。

十三歳の姫は、しかし、砂塵を巻きあげて近づき、遠ざかってゆく騎馬には目もくれず、無邪気に野草を摘んでいた。

「戻りましょう。何か大事が起こったのかも知れませぬ」

氣遣わしげに姫をうながしたのは、年のころ二十五、六に見える、きりりとした面立ちの若者であった。烏帽子えぼしに水干風すいかんの着衣は、ひとかどの家柄の子息のようであり、郎等ろうどうに過ぎない

ようでもある。

「いやです。まだ、お参りしたばかりではありませんせぬか。もう少し、ゆっくりして帰りましよう」

童着^{わらべぎ}ではあるが、色白で目鼻立ちが整った姫は、すでに女の色香をただよわせており、口調も大人びていた。

「わがままは、いけませぬ。四郎さまは、お忙しいのです。今日も、無理をもうして付き添っていただいたのではありませぬか」

千歳が叱った。

乳母は傳育役^{ゆいく}を兼ねており、領主の姫といえども遠慮することはない。しかも、千歳は河越一門の妻である。

姫はめげない。しゃがんだまま、若者を大胆なまなざしで見上げる。

「四郎さまと、少しでも長く、いっしょにいたいんです。御館^{おやかた}では、離れ離れで、めったに会えないんですもの」

四郎と呼ばれている若者は、困惑の表情である。

千歳は、ちらりと好意をふくんだ目を四郎へ向け、姫にはことさら厳しい顔をつくった。

「そのような、はしたないことを口にしてはなりません。山吹姫^{やまぶき}は、留守所惣検校職^{るすどころそうけんぎょうしき}の息女でありますぞ」

姫の出生は仁安三年（一一六八）の、山吹が黄金色の五弁の花を今を盛りと、館の周囲で風にそよがせていた晩春であった。それで、山吹と命名されたのである。

「おお、気づまりなこと」

山吹は、立ち上がった。

意外に背丈が高い。衣服の上からも充分に感じられる、みずみずしい肢体である。

「わらわも、姉さまのように、早よう嫁入りしたい。四郎さま、婿になってくださらぬか」
あどけなさが残る口振りだが、まともに見つめられて、仙波四郎は赤面してしまう。

「そのような話は、姫にはまだ早い。それに、嫁入り婿取りは、長が決める大事じゃ。めったなことを口にするとお父上が怒りますぞ」

「父上は、わらわに、やさしい。姉さまがお興入れの日、山吹は四郎さまの嫁になりたい、と申し上げましたら、父上はお笑いになって、あと二、三年たつて考えよう、と仰せられました」

十七歳の姉田鶴が、下総国の下河辺政義へ興入れしたのは、この年、治承四年（一一八〇）の春であつた。

政義は、下総下河辺荘の荘司、下河辺行平の弟であり、広大な兄の荘園を守る武将として名高い。

武蔵国留守所を預かり、京都在の国守に代わつて国務を執行している河越重頼は、隣国の有力者と縁を結んだわけである。

この時代、武家では結婚は、おおらかな夜這、妻問いは許されず、政略がからまり、長が取り仕切るようになっていた。

「あら、どうなされました。四郎さまは、わらわがきらいか」

山吹が心細げな声を出したのは、四郎の面に浮かんた、あきらめを含む、よそよそしさのためである。

「きらいでも、何でもありませんね。そのようなことは口にすべきではない、と申し上げたばかりではありませぬか。姫は、河越家の御息女、わたくしは家人けにんです。お戯たわむれであつても、向後は、お慎みなされませ」

四郎は、ぴしりと言ひ切つた。

山吹は、たちまち泣きべそをかく。ませていても、十三歳である。好意を寄せる男おのこに、なき容赦なく決めつけられれば、相手の胸中を推しはかるすべもなく、涙がにじむ。

「困つた姫さま。それに、四郎さまも四郎さま、大人げないではありませんねか」
千歳は、とまどいの態でつぶやき、彼方へ目を移す。

「また、早馬でございます。いよいよ何か出来しゅつたしたと思われまするなア」

「急ぎましょう。大殿おおどがお呼びかも知れませぬ」

四郎が真顔で二人をせかす。とたんに、山吹は、いやいやをして、しゃがみこんだ。

「わらわは、歩かせぬ。四郎さま、お急ぎなら、おぶつてたもれ」

今泣いた烏がもう笑う、そのままに、山吹はいたずらっぽく笑つて見上げる。

「ほんに、困つた姫さまじゃ。もう赤子ではありませぬぞ」

たしなめながらも、四郎はかがむ。幼女のころの山吹に、四郎はよくせがまれて、おぶつてやつたものである。

「だから、四郎さまが好き」

山吹は、うれしげに、四郎の背にしがみついた。

四郎は、かなり重くなっている山吹に、よろけながら立ち上がり、

「少しの間ですよ。このような姿を人さまが見れば、姫が急に煩われたかと、心配いたしまする」

「わらわは煩いじゃ、恋煩いじゃ」

山吹は、くつたくなく、背中ではしゃいでいる。

四郎と千歳は顔を見合わせ、苦笑をもらすほかはない。

新日吉社の杜から河越館までは、三町半（約三百八十メートル）ほどで、神域から館をめぐる堀までは、見渡すかぎり水田であった。

四郎は山吹を背負い、千歳を従えて、横の鳥居から館まで真つすぐのびる畦道を行く。

土地柄、陸稲や麦作を主とする武蔵野であるが、この入間川流域は水利に恵まれ、中秋八月（旧暦）の強い日差しを受けて青青と生育した穂に、早くも花が咲きはじめていた。

とりわけ稲に勢いがあるよう見受けられるのは、ここが領主直営の門田であり、一部が神田に当てられた、丹精こめた田地であるからにほかならない。

河越家は秩父一族である。

秩父氏は桓武平氏で、平良文（村岡五郎）の孫將常を祖とする。將常が武蔵権守となつて秩父郡の中村郷（秩父市）に本拠を構え、秩父氏と称し、特産の銅、絹織物、馬などで富を蓄えた。

将常から三代目を重綱という。

重綱の長男が重弘で、その子重能は山間の秩父から肥沃の地を求めて荒川流域の畠山（大里郡川本町）へ進出し、畠山と改名した。

それより前、重綱の次男重隆は、入間川沿いの河越の地（川越市上戸）へ移り、領主となっている。その孫が、当代の重頼である。

重頼は家督を継ぐと、領地（荘園）を後白河法皇に寄進し、荘官となって地位を固めた。

後白河法皇は、この荘園からの年貢を、当時、比叡山麓の日吉社（日吉大社）を京都東山に勧請した新日吉社（新日吉神宮）へ奉納することにしたので、川越荘は新日吉社領とも呼ばれるようになる。

したがって、河越荘の総鎮守も、京都から分靈された新日吉社に改められた。

地方の豪族が、私有する荘園を中央の権門や寺社に寄進する形をとって領家（名義上の領主）になってもらい、おのれは荘官（管理者）に甘んじる便法をとることは、必ずしも珍しくはない。

領家、荘官ともに利があつたからである。

領家には勞せずして一定量の年貢（名義料）が入る。荘官は、一定量の支出のみで、国司や目代などの搾取、横領から自領を守ることができる。また、高貴の領家を戴くほど、荘官の權威は高まつた。

河越重頼は、名を捨てて実を取ったわけである。

このため、秩父氏嫡流の畠山家が相伝していた武蔵国留守所惣檢校職は河越家へ移り、重頼

が武蔵武士団の棟梁に擬せられる地位に昇っていたのだった。

武蔵武士団は雑多である。

最大勢力の秩父一族は、畠山氏、河越氏、高山（飯能市高山）の高山氏、江戸莊（東京都千代田区）の江戸氏に分かれ、さらにそれらの支族が武蔵野に点在していた。

このほか、武蔵七党と称される中小の武士団がある。七氏に限った呼称ではなく、横山氏、猪俣氏、野与氏、村山氏、児玉氏、丹（丹治）氏、西（西野）氏、私市氏、綴氏などで、それらの分家が国内に入り乱れていた。

仙波家は、武蔵七党のうち、村山郷を発祥地とする村山氏系の一支族で、仙波（川越市仙波町）に城館を構えている。

仙波一門も河越重頼の麾下にあり、領地が隣り合っているとところから、親密な関係を保っていた。

四郎は、武勇で聞こえる仙波信平の四男である。

少年時、父のもとで騎馬戦の荒修行中、落馬して両腕を痛めてしまった。傷は癒えたが、弓手も馬手も充分には利かない。

子供心にも前途に絶望し、自棄になりかけたとき、そのことを知った大殿と称される主家の重頼に呼ばれて、菓子など賜わりながら説論を受けたのである。

「よく聞け。国を拡張、家を守るのは武人の力に依るがのう、国を治め、家を富ませるのは文吏の働きぞ。さよう、文字をよくし、算勘上手の者の手柄じゃ。武と文、どちらが重しとは言いがたい。そちは賢げゆえ、文事に励み、ゆくゆくは、われらの片腕になってくれよ」

留守所惣檢校職じきじきの、懇切なる激励である。

四郎は感激して、その日から河越家の家司に師事し、文字算勘習得に没頭した。

重頼は在庁官人の長として国衙を預かっているが、いつも府中に詰めているわけではない。

平時は、代代国衙に勤める百人ほどの能吏が、所（所管）の業務を滞りなく遂行していた。

所は八つに分れている。公文書を扱う公文所、租税を管掌する税所、戸籍関係の帳所、田

畑台帳を整備する田所、特産物である調をととのえる調所、職人を支配する細工所、訴訟を扱

う問注所、治安警察権をもつ檢非違所である。

この組織を小さくした政所（事務所）が河越館にも設けられてあった。

入間郡を中心に広大な領地を支配する河越家である。その雑多な業務に加えて、国衙にかかわる公務があり、秩父一族の総領としての責務もある。領家への年貢や交渉事もおざなりにはできない。

政所はいつも多忙をきわめている。文字算勘に堪能な家人が十数人専従しており、その元締が家司であつた。家司の河越五郎重文は、重頼の弟である。

四郎は十四歳で元服すると、早速、河越家に召し出された。城館内に家屋を与えられ、住み込みの政所家人に加えられたのである。重頼と重文から一字ずつ頂戴して、頼文と名も改めた。仙波頼文の誕生である。だが、日常は四郎の通称が用いられている。多くは、四郎さま、とさま付けで呼ばれるのは、小なりといえども仙波という領主の子息であることと、やはり人望のしからしめるところであらう。

出仕が、ちょうど主家に二番目の姫が生まれた年で、以後十三年、四郎は山吹姫の成育を見

守ったことになる。山吹が四郎に格別の思いを抱くのも、自然の成り行きといえるかも知れない。

四郎は今や家司重文の片腕であり、重頼の信任も殊の外で、河越家政所の柱石となつて働いていた。

畦道の中ほどで、四郎は背の山吹をおろして、千歳にゆだねた。

前方の、館を囲む土塁の横門にあたる埋門うづみどから、人が飛び出してきたからである。先方も、こちらを認めたらしく、大きく手を振り、

「四郎さま、大殿がお呼びでございまする」

と、叫んだ。

政所の下働きである。

「先にまいりまする」

四郎は言い置いて、駆け出した。

二重の堀にかかる木橋を渡り、埋門をくぐると、河越館の敷地は広大である。

土塁の内側は、さらに逆茂木垣さかもちぎで防備され、物見を兼ねた矢倉や、大小さまざまな倉庫が建ち並んでおり、厩うまやからは馬のいななきが聞こえてくる。

人の出入りが多い政所の建物に接して大台所、領主直営の作物所つくもじころ、鍛冶所かじどころ、織物所おりものどころ、染所ぞめどころなどの作業場があり、いずれも掘つ立て小屋に近いが、働く男女で活気を呈していた。

倉庫群と作業場の間で水面が光っている。池ではなく、舟だまりであつた。運河は、水門を

くぐつて館の外へのび、堀となつて土塁沿いに入間川へ通じている。

今一重の、外側の堀は、主として灌漑に役立てられていた。

荷舟が川から狭い運河に入つてくると、船頭の大声で手すきの者が走り出て、綱を肩にかつぎ、掛け声に合わせて舟を曳く。

折りしも、荷を満載した舟が、にぎやかに曳き入れられていた。荷は、弓、胡篋、征矢のたぐいで、このような光景にも風雲の急を、四郎に実感させる。

屏中門を走り抜けると、茅葺ながら寝殿造りに近い堂堂たる母屋が、

「四郎さま、持仏堂でございまする」

遠侍の前で、警固にあたっている家人が声をかけた。

「心得て候」

四郎は会釈を返し、大手口への通路をとる。

馬が三頭、水桶の前で荒い息を吐いているのは、先刻通り過ぎた使者の乗馬であらう。

母屋と大手門の中程に、二間四方の小舎ながら、入母屋造りの荘厳な建物がある。阿弥陀如来像と祖先の霊を祀る、持仏堂（のちの、常楽寺）であつた。

秘密を要する会合は、この御堂でおこなわれるのが、河越家のならわしである。

（とすれば、よほどの大事）

堂を遠巻きにして、十数人の家人が警戒の目を光らせている。

四郎は、一層表情を引きしめ、

「四郎頼文でございますか。お呼びでございまするか」